三省堂　国語教育

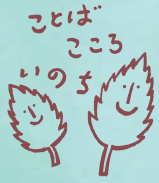
ことばの学び

a new way of learning Japanese

vol.27

特集

辞書の世界



ことばの学び

三省堂　国語教育

a new way of learning Japanese

vol. 27

CONTENTS

特集　辞書の世界

1　巻頭インタビュー　作家　三浦しをんさん

12　辞書作りの現場から　その①『大辞林』　山本 康一

14　その②『全訳　漢辞海』　武田 京

16　辞書に親しむ授業提案　ワークシート①　複数の国語辞典を引き比べてみよう

18　ワークシート②　辞書の言葉と写真を組み合わせよう

20　**実践交流**　中学書写　国語授業から協働して広げる中学書写の提案
—「百人一首カレンダーを作ろう」の実践—　谷口 邦彦

22　**見つけた！ こんな文学教材**　第３回　「花はどこへいった」（今江祥智）の間テクスト性　寺田 守

24　**サブカルチャーと国語の授業**　第３回　アニメーション教材による授業開発　町田 守弘

25　編集後記

表紙イラスト
寺井さおり（テラコリ）

特集

「辞書の世界」……巻頭インタビュー

言葉をうまく伝えられるようになるのって、一生かかっても無理というぐらい難しい。

辞書編集部を舞台にし、新しい辞書の編纂に携わる人々を描いた小説『舟を編む』の作者三浦しをんさんに、辞書にまつわるお話から、三浦さんにとっての「読むこと」「書くこと」、教育への思いなどを聞かせていただきました。

作家◉三浦しをんさん

三浦しをん（みうらしをん）
作家。1976年東京生まれ。早稲田大学第一文学部卒業。
2000年，長篇小説『格闘する者に○』（草思社）でデビュー。小説に『光』（集英社），『仏果を得ず』（双葉社），エッセイに『ふむふむ―おしえて，お仕事！―』（新潮社），『本屋さんで待ちあわせ』（大和書房）など著書多数。小説もエッセイもともに人気をほこる。
駅伝をテーマにした小説『風が強く吹いている』（新潮社）は漫画化，映画化，舞台化などされている。『まほろ駅前多田便利軒』（文藝春秋）で直木賞を受賞，のちに漫画化，映画化もされている。『舟を編む』（光文社）は2012年に本屋大賞を受賞し，映画化された（2013年4月公開）。

聞き手●三省堂出版局長 瀧本多加志，中学校国語教科書編集部／場所●東京・三省堂本社／取材日●2013年2月13日

【辞書との出会い】

重くて、言葉がいっぱい入っているし、今まで使っていた辞書とは桁が違う。「大人になった！」と思いました。紙のめくり心地とかもすごい。

――三浦さんは辞書との最初の出会いのことを覚えていらっしゃいますか？

三浦　それがあまり覚えていないんです。小学生の頃は、小学生用の国語の辞典を使っていたと思うんですが、その時はとくに引きたい言葉とかもなくて……。辞書の引き方についても授業で習った記憶はあるんですけど、何を使っていたかは覚えてなくて。ですから、私にとって辞書との出会いというと、中学校に入った時にもらった三省堂さんの『大辞林』だったんですよね。

――そうでしたか！　そうしますと、それはおそらく初版ですね。『大辞林』初版の刊行は一九八八年でした。

三浦　そうだと思います。確か、親類の誰かがゴルフコンペで当たったとか、なんかそういう感じで、そこにちょうど中学にあがった私がいたので、「あなたにあげましょう」みたいな。誰からいただいたかは忘れちゃったんですけれど。

――それはご自分専用の『大辞林』だったわけですね。

三浦　そうなんです。それで、表紙の書名が金の箔押しになっているし、重くて、言葉がいっぱい入っているし、今まで使っていた辞書とは桁が違う。「大人になった！」と思いました。紙のめくり心地とかもすごい。実は私は紙フェチの気があるんです（笑）。図版もたくさん入っていたので、それでもう夢中になって、仏像の図版を拡大模写するという行為にいそしんでいたんです。

――模写されたんですか、あの線画のイラストを？

三浦　端からページをペラペラめくっていって、仏像の図版があると、そこを読んで、気に入ったものを何枚も何枚も、けっこうな枚数書き写していました。なんでそんなことしたかわからないんですけど、大興奮でしたね。

――そうすると、三浦さんにとって最初の決定的な辞典との出会いは『大辞林』ということになりますか？

三浦　私にとってはそうでしたね。その後には、『広辞苑』も使って、両方使うようになりましたけれど、中学生になった時にいただいた『大辞林』はずっとずっと使って、もう、背表紙とかもベローンと取れちゃうぐらいになったんですが、今でも家に置いてあります。二版三版と改訂のたびに買っているんですけど、ボロボロの初版が捨てられない。

――それは辞書をつくる側の人間として、とても嬉しいお話です。ありがとうございます。しかし、今のお話を伺うと、中学生時代の三浦さんの辞書体験としては、わからない言葉が出てきたから引くというよりは……。

三浦　眺めるのが楽しいんです。

――図版も含めて、読んでいらっしゃるわけですね。

三浦　はい、ページをめくって眺めては、気になる項目を読むのがすごく好きでした。

――知らない言葉を見つけて、語彙を増やしていったというようなことはありましたか？

三浦　それが……覚えられないんですよね、そういう言葉って。「不空羂索観音（ふくうけんじゃくかんのん）」という言葉は仏像の絵を写している時に覚えて、それ以来忘れられない仏像名ですけれど。実生活や勉強に役

「不空羂索観音」（『大辞林』三省堂より）

に立つような語彙が増えたかというとそうでもなかったですね、覚えられなかった。

――辞典の世界のなかで遊ぶという、そういう感じですね。

三浦　はいはい。読むのは好きでしたし、今でも大好きです。

【辞書を引き比べる】

言葉を四角四面にとらえて「必ず何か答えがあるはず、正しい意味があるはずだ」みたいに思う、そういう考え方から解放されて、いい意味で自分もいい加減になれて楽になる。

――実際、今、小説をお書きになるなかで、辞書は引かれるほうですか？

三浦　実は、書いている時はその場の勢いでバアッと書いちゃうことが多いんですけど、ゲラのチェックの時に、「あれ？　これでいいのかな、あまりピッタリきていない気がするな。ちゃんと意味を調べよう」ということで引きますね。自動詞と他動詞がよくわからなくなることがあって、辞書を開いて用例を見て判断することも多いです。

――今、お仕事で使われている辞典はどういうものですか？

三浦　『大辞林』『広辞苑』『岩波国語辞典』『新明解国語辞典』と、あとは『日本国語大辞典』。その五種類を場合に応じて使っています。たいがい『大辞林』と『広辞苑』をセットでどっちも見るようにしていて、あとは、「この言葉だったら、このサイズの辞書に載っているかな？」みたいな感じでやっています。

――複数の辞典を引き比べる人は少ないので意外に知られていないのですが、言葉の解説の仕方（語釈）は辞書によってずいぶん違っているんですよね。

三浦　ほんとうに違いますよね。そこがまたおもしろいところだと思うんです。私も学生時代は『大辞林』一種類しか使っていなかったので、あまり気づいていなかったのですけれど、違う辞書を併用するようになるとわかりますよね。並び方も違うし、辞書ごとに、性格というか個性がそれぞれあっておもしろいなと。「言葉の意味の定義には唯一の正解があるわけではなく、各辞書がそれぞれに良いと思う説明とか解釈とかを載せているんだな」とわかってきて、ますます辞書って人間っぽいなと思うようになったんです。

――引き比べをやると、言葉を言葉で解説する方向の、その角度とか姿勢が辞書ごとに違うことがわかるんですね。その違いから、その言葉の意味の膨らみがよりしっかりわかるようになったりするので、辞書の引き比べ、読み比べというのはとてもおもしろいんです。学習というと語弊があるかもしれないけれど、少なくとも子どもから大人まで楽しめる、とても刺激的な遊びだといえますね。

三浦　ほんと、そうですよね。自分好みの紙の色とか文字の書体とかも含めて、好みの辞書ってだんだんできてくると思うんですけど、それプラス、好みの辞書とは違う視点の辞書がもう一冊手元にあると楽しいというか……。

――小学校などで辞書引きの学習を実践されている先生がいらっしゃいますけれど、クラスのみんなが同じ辞典を持つよりは、違う会

社の辞典を持ち寄って、同じ言葉を引いてみると……。

三浦　「ぼくのにはこういうふうに書いてあった」みたいな、そういうことが言い合えて楽しい。

――どっちの辞書の語釈がいいとか、なんで解釈が違うんだろうとか、読み比べのなかから言葉の意味の膨らみを確かめることができますね。

三浦　そうですね。「辞書には間違ったことは載っていないはず」「その言葉の正しい意味は辞書が教えてくれる」というように私たちは信頼していて、また辞書は事実、その信頼にこたえる書物ではあるのだけれど、正解が一つしかないみたいに、ついつい勘違いしちゃう。私がそうだったんですけれど、辞書に書いてあることは、きっとこれが絶対の答えなんだろうぐらいに思ってしまう。だけど実はそんなことはないわけで、いろいろな辞書を比べてみることによって、こっちはこう言っているとか、そういうのを知ると、言葉を四角四面にとらえて「必ず何か答えがあるはず、正しい意味があるはずだ」みたいに思う、そういう考え方から解放されて、いい意味で自分もいい加減になれて楽になる。これは、言葉に限らず当てはまることだと思うので、大きく言えば、世界のとらえ方の問題なのかもしれませんね。

【辞書の世界に渦巻く業とロマン】

そこへ到達する道のりは遠く、しかも何ルートも無数にあるという感じが、この世の中に辞書がいっぱい存在するってことに表れている。

――逆に、答えは一つではないので、みんなが一生懸命知恵をしぼって、より正確でわかりやすい語釈をめざすのだけれども、どこまでがんばっても唯一の正解には到達しない。そこがやっぱりいいところなのでしょうね。

三浦　そう、そこがいいところなんですよ。それが辞書という書物を生み出した、人類のロマン的な部分というか。もし答えが一つだったらこんなに何種類もの辞書は出ないですよね。一冊でいいですもの。

――複数の辞書が切磋琢磨しながら進んでいくわけですね。

三浦　答えがないからといって何をしてもいいのかというと、そうじゃないですよね。善悪の基準だって揺らぐけれども、だからと言ってむやみやたらに人の命を奪っていいのかというと明確にそうじゃないように、やっぱり真理みたいなものはあるだろうと。そこへ到達する道のりは遠く、しかも何ルートも無数にあるという感じが、この世の中に辞書がいっぱい存在するってことに表れている。絶対一個にまとまりきっていかないっていう、そこが人間のいいところだなという気がするんです。

――三浦さんは、書評集『本屋さんで待ちあわせ』のなかで人の「業（ごう）」というものに触れて、「私はたぶん、なにかひとつのことに取り憑かれた人間の話が好きなのだ」と書いていらっしゃいますが、『舟を編む』は、まさに一つのことに取り憑かれた人間が登場するお話ですね。

三浦　そうですね。あの小説では、辞書を作

る人の話を人間の生き方の理想像として書いたんです。業といっても、いい意味での業とそうじゃない業がありますよね。負のスパイラルにはまるような悪い意味での業も。でも、そんな業ですら、まったくないよりはある人のほうが、私には魅力的な人物に見えるんです。お近づきになりたいかどうかは別として（笑）。小説を書く人間というのは誰しもそうだと思うんですけど、そういう業にとらわれざるをえない人のほうに興味があるし、知りたい。もちろん何もないのっぺりした人なんていないんですけど。

――一種の業をかかえながら優れた仕事をした、辞書編集の先人たちが何人か思い浮かびます。昔の話ですが、神保町の旅館に半年間泊まり込んで仕事をした上司が実際にいたのです。会社もよく許したと思うのですが。

三浦　それって、会社の経費なんですよね。

――ええ、そうです。

三浦　辞書づくりに取り組むと、身の回りのことに手が回らないから、旅館のほうが便利ですよね。ご飯を作ってくれるし、洗濯や掃除もしてくれるんだろうから。それにしても半年というのはすごいですね。

――私も二五歳の時、一晩だけ、その上司と一緒に泊まり込みをさせられたことがあるんです。

三浦　その方は夜もずっとやってるんですよね？　何をしてるんですか？

――ゲラを直してるんです。

三浦　瀧本さんがいない夜には、サボって寝ていたりしないんですかね？

――いや、それはちょっとだけ寝てますね。本当にまったく睡眠なしだと……。

三浦　死んじゃいますからね。

――当時の私はゲラを直すスキルはないですから、その人の横でひたすらカードの整理をしたんです、五十音順になっているかどうかの点検を。今だったらパソコンでできる作業ですが、当時は人力でするしかないんですね。それは『言語学大辞典』という辞典だったのですが、世界の言語の名称のカード何千枚かを五十音順に並べ替えるんです。まあ、和室の旅館だからやりやすいといえばやりやすい、畳の上に広げて……。

三浦　一晩に何千枚も並べ替えられるものなんですか？

――並べ替えました。

三浦　でも、カンテツですよね？　大変すぎる！

――昔ほどそういう極端な逸話が、たぶん辞典ごとに、さまざまな形であったと思いますね。今はそういうことやると大問題になります（笑）。

【辞書を編むということ】

その製作過程には実に多くの人の考えや目が入っていて、いわば無言の対話の連続の果てにできあがっているということなんです。磨いて磨いて磨いて、お酒の大吟醸のように、本当に磨いて磨いて……という作業です。

三浦　辞書も『大辞林』ぐらい大きなものになっても、専門の人だけが読めればいいということではないですよね。どういう人が使ってもわかりやすいようにするっていうところは、エンターテインメントの精神に近いものがあるんじゃないかなって勝手に思ったりしています。

――辞書は実用書なんですよね、究極の。学術書ではない。高度な専門的知識を背景にもって作られているので専門性は高い。でも、きわめて大衆的な書籍です。専門性と大衆性って普通はまじわりようがないのだけれど、辞典というものは、その二つが実用性の一点でまじわっている希有な書籍ではないかなと考えています。

三浦　専門の先生が何人も、辞書づくりにたずさわって、それぞれが最先端の研究をな

さっていて、その成果を語釈にぶつけていると思うんですけど、その先生が書いた専門書を読んでも素人にはわからない。でも、研究の積み重ねが、多くの人にわかる形で辞書に反映されている。岩波新書でも、読んでいて「ごめん、わからない」っていうことがある。みんな向けのはずなのに、そういうものが中にはありますからね。辞書って最先端の研究をちゃんとみんなにわかりやすい形で、使える形で説明してくれているっていう、そこがすごい。

――辞書の編集者としての役割のなかでは「多くの人にわかっていただけるものになっているかを点検する」ということ、これがすごく大きいんです。一項目一項目の語釈には多くの執筆者がいるわけですけれど、専門の学者の先生に書いていただく正確な元原稿をできるだけわかりやすくするというのが編集者の腕の見せ所といいますか……。

三浦　編集者の方が一番目の読者。小説の場合でもよく言われるけれど、辞書も同じで、編集者は辞書の最初の読者であり使用者だから、ここをこうしたほうがいいとか、著者の先生とは違う視点で指摘ができる。それによってより多くの人に届く形に練っていくということですよね。

――専門書の場合だと、できあがった原稿に編集者が意見を言うことは、その内容が専門的であればあるほど少なくなるわけです。でも、辞書の場合は正反対。一番最初の、出発点の原稿から赤字（朱）が入るんです。編集者がそこで何をしているかというと、ひと言で言うとわかりやすくしているということなんですね。

三浦　そういう内容点検は編集者の方だけでやるんですか？

――編集者、校正者、内容校閲をされる編集委員など、多くの人が、それぞれの役割に応じて内容点検をします。私が辞書づくりにかかわる人間として、辞書をお使いいただいている読者の方々に一番お伝えしたいのが、『新明解国語辞典』のように個性がはっきり出ている辞典でも、たった一人で編むということはなく、その製作過程には実に多くの人の考えや目が入っていて、いわば無言の対話の連続の果てにできあがっているということなんです。磨いて磨いて磨いて、お酒の大吟醸のように、本当に磨いて磨いて……という作業です。そういうイメージで辞書を見ていただければと。

三浦　そうして大勢の人が目を通して、晴れて出版されると、今度は辞書を使う人からの意見がどんどんきて、ますます研磨されるということですね。

――はい。だから版を重ねている辞典は中身が練れていますね。どの辞書も完璧を期してつくるわけですけれど、初版というのはやっぱり、内容があちこち暴れている、バランスがとれていないという面がでてきます。それが個性と言えば個性なのかもしれないけれど……。

三浦　『大辞林』をはじめ、版を重ねている辞書の編集者の方って、次の版ではここをこ

ういうふうにしようという準備をされますよね。使っている側からすると、「ええっ、そんなところ全部直すのは大変じゃないですか！」と思うようなことを考えていらっしゃる。「でもそのほうが正確ですし、使い勝手もいいと思うので……」みたいな感じで、すごく真剣に考えていらっしゃいますよね。

――『舟を編む』では、作中の辞典『大渡海』の刊行祝賀パーティーの席上で、「明日から早速、改訂作業をはじめるぞ」という編集者の言葉が出てきますが、本当にそうなんですよ。できあがった時ほど嬉しくて怖ろしい瞬間はありません。正直言うと、できたばかりの辞書を正視できない。誤植とか、まずい部分を見つけたらと思うと見られない。だけど翌日ぐらいになると、早くも付箋が貼られているんですよ。その話をすると、そんなに間違いがあるんですか、ひどいじゃないですかと言われるんですけれども、間違いがなくても、直したいところが必ず出てくる。

三浦　ここは、もうちょっと解釈を深められたかも、というようなことが見えてくるんですね？

――はい。すべての辞書はできあがったと同時に改訂のプロセスに入っていく。みんな本当にそう思っていて、ほぼ無意識に改訂を始めてしまう。

三浦　すごいことですねえ。私の場合は小説を本にしていただいても、読み返すことは、ほぼないんです。担当の編集者の方から「できました！」と送っていただいて、ついに形となったとうれしいんですけど、怖いからあまり開かない。

――星新一さんは、自身の作品の書き直しをずっとなさっていたそうですよね。

三浦　そう、もう信じられない。文庫になる際に大幅に加筆修正する人もいるけれど、私は基本的にはしませんね。心臓に悪いですもの。

――三浦さんは文庫化される時に手を入れたりはなさらない？

三浦　極力、入れないようにしています。ウワッて思っても入れないです。単行本の時に読んだ人に「文庫ではなんだか印象が違うな」と思わせては悪いというのもありますし、自分の精神が耐えられないということもあります。

【書くよりも読んだ―中学校時代】

学校の図書館はすごい勢いで利用してましたし、学校帰りには必ず本屋さんに寄って、何時間か徘徊しないと家に帰れない、という生活でした。

――プロの作家になられた方には失礼な質問かもしれないのですが、作文はお好きでしたか？

三浦　嫌いでしたね。何を書いていいかわからなかったです。読書感想文とか。

――書く力、文章力はあるのに、ということですね。

三浦　いや、どうでしょう。あまり書きたくないし、書くべきことが浮かばなかった。

――それは与えられたテーマだったからですか？　ご自身はいっぱい書かれているわけですよね、ハードボイルドとか。

三浦　それは、ただたんに、その時に読んだ

『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』に感動してのことだったんです。それっきり何も書いていない。

――本はものすごくたくさん読まれていましたよね。感想文を書いてきなさいというような宿題ではなく、自分で書きたいから書いたというようなこともなかったのですか？

三浦　それもなかったです。読んだら読みっぱなし。何を読んだとかメモを付けたこともないので忘れていく。だから、たぶん教科書のことも覚えてないんでしょうね。ちなみに、日記のたぐいも続いたためしがないんです。日記帳を買って、「やってみるか」と思ってもたった一日だけ。

――小説家、物書きといわれるお仕事に就かれた方のなかには、小さい頃から文章を書くのが好きだったという方がたくさん……。

三浦　いらっしゃいますよね。私は全然そういうのはできませんでした。読書感想文もどう書いていいのかがまったくわからなかった。そもそも、本を読んでそのあとに感想を書きなさいって言われても、そういうものってすぐに言語化しにくいですよね。ブログなどで、自分が読んだ本について、「私はこう思った」という記録を全世界に公開してる人がいっぱいいますよね。それは本当に不思議で、よくこんなすぐに書けるな、すごいなって。読書感想文も他の作文も大の苦手でした。何を書いていいのかわからなかった。それよりは教科書や本を読んでいるほうが楽しかったですね。

――中学生の頃には、お小遣いをもらってよく本屋さんに行っていらしたんですよね。

三浦　はい。でもマンガばっかり買ってましたけど（笑）。

――呉智英さんの名言にもあるとおり、マンガは本ですから。

三浦　そうですよね、そうですよね！　子どもの頃から、マンガを読んでるんですけど、マンガで漢字が自然と覚えられるということはありますよね。小説は学校の図書館で借りて読んでいました。中学生の頃は、丸山健二、坂口安吾、久生十蘭とかその辺りが好きでした。学校の図書館がけっこう充実していたんですよ。全集になっているものも読んだりしてました。

――中学生の三浦しをんさんにとっては、図書館や書店は特別なお気に入りの場所だったのですね。

三浦　そうですね。学校の図書館はすごい勢いで利用していましたし、学校帰りには必ず本屋さんに寄って、何時間か徘徊しないと家に帰れない、という生活でした。

――そうなると、それは一種の中毒のような……。

三浦　完全に中毒です。やめられないんですよ。それくらい本を読むのは好きでしたね。書くよりも読むほうが今でも好きです。

――教科書にどんな作品が載っていたらいいと思われますか？

三浦　すごくメジャーで文豪という域に入っているような大作家の文章も入ってて欲しいけれど、文庫になるにはどうしたってマイナーすぎて難しいような海外の短編小説などもあるといいですね。たとえばイタリア人の書いた短編とか、南米文学などにも中学生が読んだっておもしろいと感じるものがけっこうあると思うんです。もちろん、ＳＦもいいですね。星新一さんの作品にしても、教科書で読んでおもしろいなと思って次々に他の作品を読み始めましたし、筒井康隆さんも載っていたかな。超現代の最新ＳＦ短編とか、そういうエッジが効いたもの、最新の文学事情というものを反映させたものがあるといいと思います。リアルタイムで生きている作家が何を世界に向けて書いているかというのを知ることがすごく重要な気がするんです。教科書ってやっぱりちょっと文豪寄りになっていますよね。教科書はそういうものなのかもしれないけれど、両方あってもいいんじゃないでしょうか。まだ評価も定まっていないよう

な実験的な作品などがあると、「小説って、なんかおもしろいかも」と思ってくれる中学生が必ずいるような気がするんです。長い作品でも抄出ができればいいんですけど、それが難しければ短編を選べばいい。でもやっぱり、できれば作品全部を読みたいですね。それと、著者の顔写真は絶対載せてほしい。みんな今も落書きしているはず（笑）。

【みんなで読むということ】

言葉をうまく伝えられるようになるのって、一生かかっても無理というぐらい難しい。

――さきほど読書感想文のお話の時に「国語の授業って、読んですぐに感想を聞かれていたな」「そんなにすぐに言語化できるのかな?」というお話がありましたが、言語化できる、アウトプットできるようになるというのは、どれくらいの時間が必要なものなのでしょうか?

三浦　すぐには言語化できないと言いましたけど、そのままにして、言語化しないままボンヤリしていると、忘れてしまうという弊害もあるんですよね。文章化するというのは、読んだ時の自分の思いや考えを記憶として定着させるという意味もあって、しかも、無理矢理にでも言語化しようと試みることは、その時に何を思ったのかを考えるきっかけにもなるから、直後に感想を書かせるというのも悪くはないんだろうなっていう思いもあります。そうでもしないと記憶が流れ去ってしまうということはありますから。

　ただ、言語化のコツをつかむのには、それなりの時間と訓練が必要ですよね。中学生ぐらいで自分の気持ちとか考えたこと、感じたことを、はじめから明確に頭の中で言語化できる人は少数派なんじゃないかという気がします。少なくとも私が中学生の時は、モヤモヤを感じてはいたし、考えてはいたけど、明確に言語にして誰かに伝えることはできなかったなと思います。大人になってもあまりうまくできないけれど。中学生といえばお年頃ですし、自分の感情や意見を友達に言うのは恥ずかしいという気持ちがあったと思う。ですから、それを恥ずかしがらずにできるように「おかしいとか間違いだとか言わずに、自由に書いたり話し合ったりしましょう」みたいな感じにうながしてくれる先生であれば、教科書の作品がいい刺激になって、みんなで話が盛り上がるようになるし、言葉で表してみよう、言葉にして人に伝えてみようという気持ちが育ってくるように思います。言葉をうまく伝えられるようになるのって、一生かかっても無理というぐらい難しい。伝えたり、うまく感じとったりすることって、本当に難しい。でも、授業の中で作品を読んで、それぞれがどう思ったのか、無理強いではなくうまく言語化をうながすような場ができれば、それはとてもいいことですよね。そういう経験を子どもの頃にするのは大事なことだと思います。

――それが負の思い出にならないことが大事ですね。

三浦　そういうふうにもっていっちゃだめですよね。それは先生の問題だし、クラスの雰囲気も関係してくるでしょうね。そういう先生は少数派だと思いますが、どの世界にもや

る気のない人はいないわけではない。みんなの興味とか好奇心とかをかきたてるのがへたな先生もいるでしょう。その場合、授業で感想を言ったり書いたりするのは、生徒にとっては苦痛ですよね。生徒がこうだと思うって言ったのに、「はあ？　何言ってんの」みたいに聞く耳をもたないような先生だと、生徒は自分の考えや感情なんて絶対に言おうとしなくなります。こればっかりは、残念ながらみんながいい先生にあたるとは限らないし、難しいですよね。

【読むということ、教えるということ】

よかれと思ってしたことが、その子にとって苦痛であることだってあると思います。子どもによって受け取り方が全然違いますから。だからこそ教育は難しいし、だからこそ教育が重要。

――「国語を嫌いな子をどうしたらいいでしょうか？」と聞かれたら、どうお答えになりますか？

三浦　私はそれは簡単なことだと思っていて、国語が嫌いとか本が嫌いとか、本が読めない、つまらないという人は、読まなくていいんですよ、本なんて。他に興味のあることがあると思うんですよ。ゲームでもスポーツでも他に好きなことや得意なことが、一つぐらいは誰しもある。それをやればいいのであって、みんなが無理して本を読む必要は全然ない。「本なんてつまらない」とハナから決めつけず、いつか性に合う本と出会った時のためにも、最低限困らない程度の漢字の読み書きぐらいはできるようにしておく。それでいいんじゃないでしょうか。たとえば私は、数学を好きになれって言われても無理です。プライベートな時間にまで計算問題を十五分やりましょうと言われたら、ヒーッってなる。無理に数学を好きにならなくたって、買い物に困らない程度の計算能力があればいいでしょう？　興味さえ捨てずにいれば、数学の問題を解くことはできなくても、本やテレビ番組を通して数学の世界や数学者について知ることはできます。

――「計算能力は生きる上で必要な技術となります、だから勉強しておきましょう」という薦め方と同様に、「読書は生きる上で必要です、それは私たちの心を豊かにしてくれるからです」というような薦め方をされることがありますが、それはちょっと……。

三浦　違うんじゃないかと思いますね。本は一人で読めますから、自分の世界に入っていってしまうということでもあるんです。むしろ視野が狭まってしまう危険性だってあるわけです。「たくさん本を読んだら心が豊かになる、人格が磨かれる」というのは、「子どもを持ったら人間が大きくなりますよ」というのと同じ幻想です。もし、子どもがいる人が人間的に成長して心が豊かになるのであったら、いまごろこの世界はもっと良くなっているはずですよね。でもそうはなっていない。子どもを生み育てようと本を読もうと、それは人格とか心の豊かさとは単純に比例しないということです。自分の世界を広げていくのは大切なことですが、そのすべては本以外にもたくさんあります。たとえば、草野球とかサッカーで交流するとか、映画を見るとか。会社がそういう場であることもあるだろうし、インターネットの世界を通じてそれを獲得している人もいるだろうし。読書を特別に考えて無理に本を薦めるのは、良くないんじゃないでしょうか。そもそも、これをすれば心が豊かになるとか、これをしなかったら人間が堕落するということはないし、よかれと思ってしたことが、その子にとって苦痛であることだってあると思います。子どもによって受け取り方が全然違いますから。だか

らこそ教育は難しいし、だからこそ教育が重要。先生や教室内での友達とのかかわりこそ、人にとってすごく大事なことだと思うんです。子どもを型にはめようとする先生が一番よくない。それはどんなに熱心な先生でもよくない。なるべく多くの生徒の好奇心をちょっと刺激してあげることのできる先生、授業のなかで「そんな話があるのか！」というような刺激をちょっとした雑談とかで提供してくれるような、そういうセンスのある先生の授業は、あとあとまで記憶に残るし、楽しい授業になると思います。私の経験した国語の授業でいうと、一見、自由に発言できるような授業でも、「この話の読み方はこうです」と断定される先生もいらっしゃいましたけど、そうじゃない先生のほうが楽しかったし、教科書以外の話を読んでみようと思うきっかけになったような気がします。

――これは社会人にも当てはまることだと思いますが、自分で何かしてみようと自発的に始めることが大切なのであって、無理にする、させるという手法では、その人の学びにとって効果が望めないということですね。

三浦　はい。知らないよりは知ってるほうがいいし、やらないよりはやってみたほうがいいとは思うんです。でも、やりたくない子に無理して薦めてもしょうがない。読まないより読んだほうが新たな世界を知ることもできるんだろうけど、読むのが苦痛で苦痛で仕方がないという人に無理に薦めてもどうなのかなっていう気がしているんです。ただ、その人がなにかを必要だと感じた時に、「そういえば」と助けになるような知識や情報をさりげなく与えておいてあげる。事態を解決する方法を自分で見つけられるような、好奇心や思考力を育ててあげる。それこそが人間にとって大切な教育ではないでしょうか。中学生の頃は全然だったけれど、大人になって本好きになったという人はけっこういますよね。あせる必要はないと思います。

■了

＊インタビューの全編を弊社辞書ウェブサイトにて公開しています。
http://dictionary.sanseido-publ.co.jp/topic/interview_miura/

辞書作りの現場から　その①

『大辞林』

辞書出版部　国語辞書第二編集室
辞書出版部部長／『大辞林』編集長
山本　康一

〝一冊ものの大型国語辞典〟

初版の『大辞林』は企画から刊行まで二十八年かかったといわれています。一九八八年に初版が出ていますので、企画そのものは今から五十年以上前のことになります。『大辞林』は古代から現代までの国語項目に加えて、人名、地名、作品名、固有名詞を含む百科語と専門用語、術語を含めて二十万を超える項目を掲載しています。これだけの項目数なので、二百人を超える方々に執筆もお願いしてきました。国語辞典の分類としては中型辞典ですが、一冊ものの大型国語辞典ともいえるでしょうか。

私は、九三年入社なので、九五年に刊行された第二版から関わりました。入社してすぐ、編集部員として改訂作業に関わりました。当時、編集部は六、七人ぐらいの体制でしたが、もちろんそこには外部の協力者、校正者の方もいましたから、実際に編集作業に関わる人数は、それ以上です。続く第三版では、企画や検討での関わりでしたが、その一環として、辞書を紙とデジタル（ウェブ）の両方で使える「デュアル・ディクショナリー」の制作に携わりました。

時代の変化をとらえる

『大辞林』は初版二十二万語、第二版は二十三万三千語、第三版は二十三万八千語収録しています。加えて、ウェブなどの電子媒体のみに掲載している項目もあるので、現時点で、総項目数は二十六万三千。日々増え続けています。

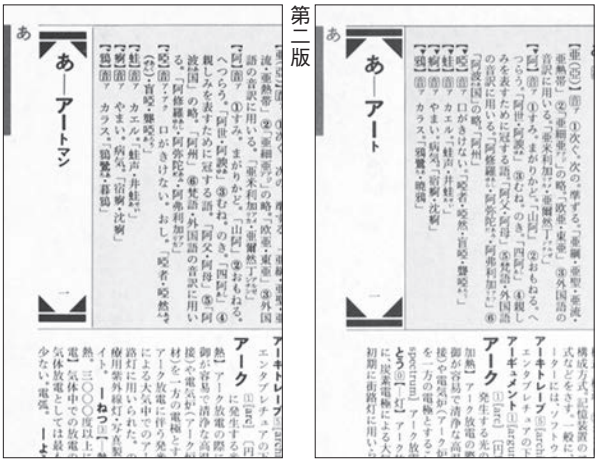
改訂時には、時代の変化をとらえ、これら二十万を超える収録項目の見直しをしてきました。

第二版（一九九五）の時は、社会の複雑化に伴って流通するようになった多様な言葉の対応という視点から、百科語の増補が目立ちました。

第三版（二〇〇六）刊行時は、インターネットが普及しはじめてから十年が経過し、百科的な情報へのアクセスの仕方がまるで異なってしまっていました。百科的な情報はインターネットで即時的に得られることから、書籍への期待は相対的に減ってしまい、第三版では、むしろ国語項目に注力することにしました。国語辞典としての基盤によりみがきをかけ、百科的な情報や時事的な用語は、ウェブ版の「デュアル大辞林」（書籍の第三版を買った方が無料で利用できるサービス）で常時増補していく、「デュアル・ディクショナリー」というかたちをとりました。

電子媒体では最新の要求に応え、紙媒体では、中身も情報量もいちばんの使いやすさで応える

電子媒体の辞書には、時代を反映して新しい語や語義・用法を次々に取り入れていけるという長所があります。新聞、雑誌などのメディアをはじめ、多方面にわたり、時事用語、新語、



第二版では，余白側へ柱をずらし，行数を増やした

製本機にかけられる限界の厚さ

流行語など、最新の言葉を観察し、集めてくれるチームがいます。

一方、紙の辞書には物理的な制約があります。このように常時項目を増補していっても、改訂の時には、収録項目を取捨選択する作業に直面します。できるだけ多くの項目を収録するために、紙を薄くしたり、ページ数を増やしたり、工夫をするのですが、実は、『大辞林』の厚さは、すでに、製本機にかけられる限界の八センチぎりぎりなんです。つまり、製本できる最大の厚さにあるということになります。

この限界は一面では制約です。しかし、一冊で手元におけるというのが中型辞典の利点だと思いますし、人の扱う情報は、このぐらいの規模が適当だと思っているところもあります。例えば検索サイトなどである言葉を検索した場合、何百万と候補が出てくることがあります。これに全部目を通すことはできません。また、解説の分量があまりに多すぎても、かえって混乱します。簡潔に知りたい言葉を知る、情報・知識への入り口としての役目を果たすためには、ある分量にとどめることも必要だと思います。

紙の辞書ならではの工夫もあります。同じような紙面ですが、よく見ると、版ごとにデザインが少しずつ違うんですよ。本のデザインは、エディトリアルデザインの世界を牽引してきた杉浦康平事務所に初版から第三版までお願いしています。先ほどお話したように、紙の辞書の場合、物理的な制約があり収録できる項目数が限られますが、杉浦さんは、限られた中で、たくさんの項目を入れられるデザイン的な工夫をしてくださっています。たとえば、柱の入れ方を工夫することで、初版と第二版では一段の行数が変わりました。第三版では、余白を少し狭くして、行数を増やすこともしています。

電子媒体で常に項目を増補しながら、ある時点で、分量の制約をともなう紙の辞書の編集を行う意義とは、時代に必要とされている項目を厳選し、時代の記録として一冊にまとめるというところにあると思うのです。

紙の辞書は一定期間の時代の記録を残す存在であり、日々項目が増え続ける電子媒体の辞書は、紙の辞書に載るもの、載らなかったものも含めて、通時的に言葉の総体を記録し続ける存在である。今の時代には、その両方が必要だと感じています。

知りたいという要求に広く応えられる本でありたい

辞書というのは、その時代の言葉の記録にもなっています。『大辞林』は、その時々に出てくる言葉、国語項目も含め、百科関係、時事用語であったり、新しく出てきた語や用法に向き合って、常に言葉に関して知りたいという要求に応えられる辞書でありたい。そのために辞書の改訂に力を注ぎ続けていきたいと思っています。（談）

辞書作りの現場から　その②

『全訳　漢辞海』

辞書出版部　国語辞書第三編集室
『全訳　漢辞海』編集長　武田　京

漢字によって表現されたことば
――漢語そのものを学習するための漢字辞典『全訳　漢辞海』

『全訳　漢辞海』は、二〇〇〇年に初版が刊行されました。すでに長澤規矩也先生の『新明解漢和辞典』など漢和辞典出版の長い歴史をもつ小社として満を持して世に問うた新しい漢和辞典でしたが、誠に幸いなことに、読者のみなさまに好評をもって受け入れていただくことができ、必ずしも好調とは言えない出版環境のなか、二〇〇六年には『第二版』を、そして、二〇一一年には『第三版』を刊行することができました。漢和辞典という堅実ではあるものの特に注目を集めることも少ないと思われる辞典で、このような短期間に版を重ねることができたというのも、『漢辞海』の先進的な編集方針が幅広い読者のみなさまの御支持につながったからにほかならないと、担当編集部として誠にありがたく受け止めております。

振り返ってみれば、入社早々に計画中の純新刊漢和辞典の担当を命ぜられ、編集担当として『漢辞海』に携わるようになってから、早くも二十年が過ぎました。

それまで漢和辞典はもとより辞書編集の経験もない新入編集部員ではありましたが、そのような〝素人〟であったことがかえって良かったのかもしれません。専門的な教育を受けていれば、つまらぬ先入観が編集方針の具体化のうえでも障害になったことに相違ありません。しかし、漢和辞典に対して白紙の状態で臨んだ新人編集担当は、先生方の先進的な編集方針をそのまま素晴らしいものとして受け止め、それを読者のみなさまにわかりやすいかたちで御提示することに、自分の使命を見出しました。正に『漢辞海』とともに歩んだ二十年でした。

何も無いところからすべて手作りで作り上げた辞典

『漢辞海』は純新刊の辞典です。

中国学研究の第一人者である戸川芳郎（とがわよしお）先生に御監修として御指導を賜りつつ、同じく気鋭の研究者である佐藤進先生と濱口富士雄先生の編者お二人を中心に、多くの先生方やご協力者の英知と努力を結集して編集されました。

編集に当たっては、従来の漢和辞典がそうであったような漢字を単に和訓に置き換えて理解しようとするのではなく、あくまで漢語として漢字を捉え、的確な例文を掲げて、実際の文脈にそって語義を読解することを編集方針の柱としました。そのためには、古漢語を品詞別に分類し、文法を踏まえた解説を施し、これに訓も合わせて示したうえで、用例には書き下し文を

『漢和大字典』（右）と『全訳　漢辞海』（左）

添えて、現代日本語訳で全訳を施すこととしました。これだけで、従来の漢和辞典とは一線を画す漢和辞典であるということがおわかりいただけるかと思います。

必然的に、従来の漢和辞典では参考になるところがありませんので、中国における最新研究をまず第一に踏まえながら、収録語数―親字一万強、熟語五万語以上―のすべてを新たに書き起こすことが必要でした。何度となく編集会議を開催し、編集方針を練り込みながら、それに基づいて、収録する親字・熟語の選定を行い、執筆協力をしていただける先生方へ御依頼し、正に一から原稿を揃えていきました。既存の漢和辞典を換骨奪胎すれば出来上がる原稿ではなく、先生方も相当に御苦心を重ねられたものと思います。

そのような次第で、編集開始当初は数年後の刊行を意図していたものの、原稿の執筆には大変な時間を要することとなり、刊行日程も度々の延期を余儀なくされました。

一方、長期に及ぶ編集期間のなかでは、貴重な参考文献である中国の『漢語大詞典』全十三巻が完結し、また台湾の中央研究院をはじめとする多くの漢籍データベースも徐々に完備されるようになり、編集環境も格段の進歩を遂げていったことはむしろ大きな収穫でもありました。原典確認など、以前であれば相当な困難と労力・時間を要したと思われるもののほとんどが、現在では自分のデスクのうえでできるようになっています。そのような時代の変化も最大限に活用しながら、ついに二〇〇〇年、刊行のときを迎えることとなったのです。

刊行当初、編者の先生方はじめ編集部もその編集方針には確信をもってはいたものの、果たしてそれが読者の御支持を得るに至るのか、予断を許さないところでしたが、その後の読者の御支持と順調な発展は、既に述べた通りで、誠に幸いであったと日々噛みしめております。

『漢辞海』は、当初の編集方針の段階から、漢文読解のための古漢語辞典としての側面と同時に、現代日本における漢和辞典として、常用漢字表をはじめ、人名用漢字表、表外漢字字体表、ＪＩＳコードなどの漢字コードや名付けをする際の名乗りなどにも対応しています。『第二版』では、人名用漢字の大幅拡充や表外漢字字体表を踏まえた改訂を施し、二〇一一年春の『第三版』では、前年末に二十九年ぶりに改定された「常用漢字表」の改訂を待ったうえで、最速の刊行を実現しました。現在お手元にお届けしております『第三版』では、その成果として、新しい常用漢字には「★」印を付して、一目瞭然でわかるようにお示ししています。

そのように、漢和辞典に求められる多くの側面を常に意識し、もっとも良い形で読者のみなさまにお届けするということを常に意識して、今日も編集に当たっています。

読者のみなさまとともに

日本で最初の近代的な漢和辞典『漢和大字典』が小社から刊行されたのは一九〇三（明治38）年）のことでした。百年の時を経て、『全訳漢辞海』のような画期的な漢和辞典を刊行することができたというのも、小社であるからこそできたことであり、そして何より、読者のみなさまの長年にわたる御支持があったからこその賜物であると実感しています。

今後も読者のみなさまとともに、より良い辞書を生み出し、育てていきたいと思っています。

■特集　辞書の世界

辞書に親しむ授業提案

ワークシート①

複数の国語辞典を引き比べてみよう

《配当時間》
1　伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項
《学習目標》【　】は対応する学習指導要領の指導事項を示す
・語彙について関心をもち、語感を磨く。
1年【言（ウ）】／2年【言（イ）】／3年【言（イ）】

同じ「国語辞典」でも、辞書によって、書かれている語釈は違います。ここでは、そのことに気づき、「物事の説明の仕方にはいろいろある」と認識する学習に一役買うワークシートを提案します。

このワークシートは、個人の活動として使用することもできますし、グループでの活動として取り組むこともできます。グループ活動とした場合には、生徒同士の「対話」を生み出す場面も多く見られると思います。

複数の辞書で同じ言葉について調べる活動では、複数（できれば四種類以上）の国語辞典を準備し、各辞書で語釈がどのように異なるかを引き比べる活動を想定しています。調べる言葉は、「うれしい」のような形容詞、「走る」のような動詞、「音楽」のような抽象的な概念を表す名詞が適しています。また、日頃わざわざ辞書を使って調べないような身近な言葉を選ぶことで、あらためて言葉について意識することにつながる活動にもなります。複数の辞書で調べた後には、気づいたことを言語化し、振り返ります。まずは全員が、辞書によって書かれている内容や分量が異なることに気づくことが大事です。

次に、辞書によって語釈が違うことをふまえたうえで、自分でも語釈を考えてみます。ここで見出し語として設定する言葉は、①で調べた言葉以外に、新たに設定します。生徒にとってなじみのある言葉を選ぶのがポイントです。身近で知っていると思っていた言葉でも実際に書いてみると、説明の仕方はひとつでないことの難しさにも気づくと思います。

ペアやグループで同じ言葉についての語釈を考え、それぞれの内容を比べて共通点や相違点を交流する活動や、ひとりひとりが違う言葉について担当し、ひとつにまとめて辞書を作る活動につなげて、この学習を終えます。

■学習の流れ

時	学習活動
1	(1)　複数（できれば四種類以上）の国語辞典を用意する。（グループでの共用もあり） (2)　調べる言葉を決め、複数の辞書で語釈を引き比べる。 〈★ワークシート①〉 (3)　(2)の活動を通して気づいたことを振り返りまとめる。 〈★ワークシート②〉 (4)　見出し語とする言葉を決め、各自で語釈を考える。 〈★ワークシート③〉 (5)　ペアやグループで同じ言葉について語釈を考え、書いた内容を交流する。もしくは、クラスの全員が違う言葉についての語釈を考え、一冊の辞書にまとめる。

複数の国語辞典を引き比べてみよう

―辞書による語釈の違いを知ろう―

年　　組　　番　氏名

① 複数の国語辞典で同じ言葉について調べてみよう

◆調べる言葉（辞書の見出し語）　「　　」

調べた国語辞典の名前	語釈（言葉の意味）
『　　』	
『　　』	
『　　』	
『　　』	

② 辞書を引き比べて気づいたことをまとめよう

・

・

③ 言葉を決め、自分で語釈を考えてみよう

（見出し語）

【　　】

（語釈）

■特集　辞書の世界

辞書に親しむ授業提案

ワークシート②

辞書の言葉と写真を組み合わせよう

《配当時間》
1　伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項
《学習目標》【　】は対応する学習指導要領の指導事項を示す
・語彙について関心をもち、語感を磨く。
1年【言（ウ）】／2年【言（イ）】／3年【言（イ）】

辞書の言葉と写真を組み合わせて、一つの作品をつくります。語感を鋭くして、発想を豊かにすることで、楽しい作品ができます。

まず、各自写真を持ち寄り、その写真に合わせた言葉を選びます。

言葉を選ぶ際には、例えば、被写体が妹の場合、「妹」という、写真に写っているそのものをさす言葉よりは、「同志」や「宝物」など、被写体から発想を広げた言葉を選ぶようにすると、よりおもしろい作品ができるでしょう。

また、まず好きな言葉を選び、あとから写真を選ぶという方法もあります。

言葉を選んだら、国語辞典でその言葉を引き、語釈を引用します。ここでは、日頃使っている言葉の意味をあらためて調べてみる、自分の使っている言葉への意識を高めるという意味合いが含まれています。

語釈を調べ、意味を確認したうえで、用例を作成します。辞書の語釈についている用例を作るイメージです。（必ずしも選んだ写真と関連させる必要はありません。）

活動の最後は、クラスの作品を集めて「アルバムディクショナリー」を作成したり、展覧会を開いたりすることで、友達の作ったものを見て感想を交流するという「対話」の生まれる学習活動へとつなげることができます。

■学習の流れ

時	学習活動
1	(1) 各自写真を用意し、枠内に貼る。 (2) 写真から喚起される言葉を選ぶ。 (3) 国語辞典で言葉を調べ、語釈を引用する。 (4) 用例を作成する。 (5) 作品を交流できる場をつくり、感想を伝え合う。

■ワークシート記入例

辞書の言葉と写真を組み合わせよう

―語感を研ぎ澄ませて、言葉と写真の組み合わせを楽しもう―

年　　組　　番　氏名

（選んだ言葉）

（意味＊辞書の語釈を引用しよう）

（辞書名）『　　』より

（用例＊選んだ言葉を使った例文を考えよう）

・

・

ここに写真を貼る

国語授業から協働して広げる中学書写の提案
―「百人一首カレンダーを作ろう」の実践―

谷口　邦彦

百人一首を素材とした教材の開発

書写の学習は系統的にそして反復的に行われる。おもに技能（スキル）を身につけるための学習である。身につけたスキルは国語の学習や日常生活に生かされていく。一方、ふだんの国語の学習を書写と関連づけ、書写スキルの不足部分に気づかせつつ、国語から書写へと広げていく形態の授業も注目されはじめている。

筆者はかつて広島大学附属中学校において三年生を対象に「百人一首カレンダーを作ろう」を実践した。6～7名のグループで担当月を決め、その季節にあった歌を選び、小筆で書いてカレンダーへ貼る。卒業記念としても喜ばれた。

百人一首は短歌の授業でも扱われ、中学生にとって馴染みのある素材である。書写に関しては、練習にちょうど良い文字数、配列配置を工夫しやすいなど、主体的に取り組める素材と言える。歌から季節をイメージしたり、気に入った歌を選び内容を調べたりできるなど書きながら読みを深めることも期待できる。

本欄では二〇一一年四月、呉青山中学校の二年生を対象として行った特別授業の様子を紹介する。呉青山中学校は、学校行事として百人一首大会が行われ、国語科は授業内外でそれに向けた学習や準備を行っていた。なお、この授業の様子はＤＶＤに収録された（注）。

第一時　担当月にふさわしい歌を選ぶ

①「百人一首カレンダー」の作り方を把握する。

6枚綴り（例：4-5月頁、6-7月頁、8-9月頁、10-11月頁、12-1月頁、2-3月頁）、6～7人のグループで1年分を制作すること。

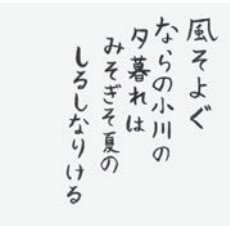
②担当の頁にふさわしい歌を選ぶ。

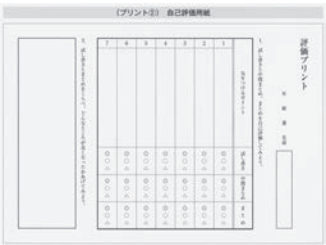
歌から季節をイメージすることができるようになる。

第二時　試し書きをする

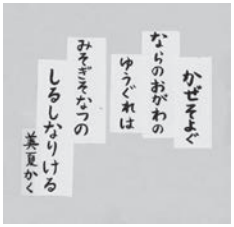
①用紙へ試書し、評価する（「自己評価用紙」）とともに、教科書の参考作品例や「評価活動を促すための作例」を示し、改善案を作る。

・周囲の余白を取る
・行の中心をそろえる
・行頭、行尾をそろえない
・行間に変化をつける
・漢字を交ぜる→字大の変化がつく



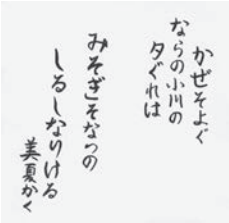


②配列・配置を考える。
短冊に書く。5つのポイントを踏まえ短冊を切り、用紙へ配置を工夫して貼る。全体で今一度目標を確認し、全体の配置を仮決定する。



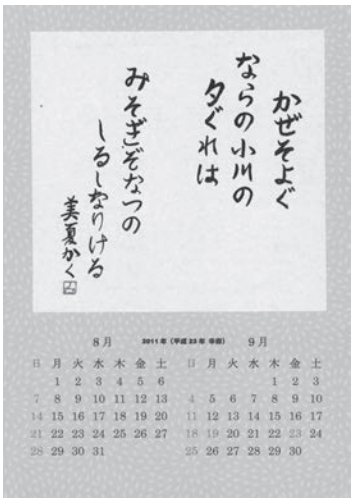
第三時　行書に調和する仮名の練習

①行書の特徴と共通な書き方に気づく。
・終筆が変わる
・線がつながる
・線が省略される
②用紙に書く。
③行書に調和する仮名の練習をする。
（空書。苦手な平仮名の取立て学習をする。）



第四時　まとめ書き

①用紙に書く。
②全体の配置を決定し、まとめ書きをする。書き浸る。最低限の個人指導を行う。グループの人数分を書く。
③カレンダーへ貼り、完成させる。
（消しゴム印で良いので、印を押すと見栄えが良くなる）



第五時　相互評価をする

①試書からまとめ書きまでを並べて自己評価した後、グループ内で作品を見ながら相互評価する。
②班長が、グループ内の評価の様子を全体に報告する。

求められる三つの書写力

本実践は、芸術性を加味した表現能力の面を意識したものになっている。ただし、この「表現するための書写力」以外にも、目的や相手、書式などにあわせて意思を的確に「伝達するための書写力」や、メモ・ノート（記録）をとる速度やアイディアの湧出にあわせて「記録するための書写力」等をいかにつけていくかが、今、書写に求められている。

中学校の書写（特に二、三学年）においては、スキルの学習に固執することなく、ふだんの国語の授業から国語の先生方による新しい書写授業を提案していただきたい。ここでは五時間の単元学習の形態をとったが、学習指導計画作成にあたっても柔軟でありたい。

注
DVD「百人一首カレンダーを作ろう」（株）坪川毛筆刷毛製作所（広島県呉市）制作

参考文献
久米公監修　千々岩弘一、鈴木慶子、松本仁志編著『書写スキルで国語力をアップする！　新授業モデル　中学校編』明治図書　二〇一一

たにぐち　くにひこ　安田女子大学文学部書道学科准教授。専門は書写書道教育、漢字書法。中・高教員経験を生かして書写書道の授業に関する実践的な研究を続ける。

見つけた！こんな文学教材

京都教育大学　寺田　守

●第３回●

「花はどこへいった」（今江祥智）の間テクスト性

間テクスト性概念に着目して、今江祥智の「花はどこへいった」を読む視点を考えたい。間テクスト性とはあるテクストが他のテクストの引用の織物だという性質を表す文学批評用語である。クリステヴァは、バフチンの「対話性」概念を広げ、「どのようなテクストもさまざまな引用のモザイクとして形成され、テクストはすべて、もうひとつの別なテクストの吸収と変形にほかならない」と提起した。

今江祥智の「花はどこへいった」は、一九六四年に雑誌に発表され、翌一九六五年に『ちょうちょむすび』（実業之日本社）に収録された。教科書には一九七一年度から一九八八年度まで掲載された。「花はどこへ行った」（Where have all the flowers gone?）といえば、米国のフォークシンガー、ピート・シーガーの歌として知られている。シーガーの発表は一九五五年だが、一九六二年にキングストントリオやピーター・ポール＆マリーによってカヴァーされ、世界の多くの国で広く知られた。今江の「花はどこへいった」が書かれたのは一九六四年であり、シーガーの歌を物語に翻案した作品だと考えられる。

シーガーの「花はどこへ行った」は世界で最も有名な反戦歌である。六〇年代初頭から七五年四月三〇日まで続いたベトナム戦争の最中に、ピーター・ポール＆マリーが反戦運動のアピールとして積極的に歌っていた。六八年にはベトナム戦争が泥沼化する中で米軍の兵士達が基地でこの曲を歌う様子がテレビで放送され、反戦歌として有名になった。

「花はどこへ行った」の歌詞は、「花はどこへ行った?」という問いから始まり、「娘が摘んだ」「娘はどこへ行った?」「若者のもとへ行った」「若者はどこへ行った?」「戦争へ行った」「兵士はどこへ行った?」「墓へ行った」「墓はどこへ行った?」「花に覆われた」と続く展開が印象的である。「いつになったらわかるのだろう?」という問いが繰り返され、人間の営みへの批判が込められている。今江の「花はどこへいった」が持っている他と置き換えることのできない意味を探る手がかりは、シーガーの歌との差異にある。

第一の相違点は、ただのflowersでなく、ウミチドリの花として描写され、かつ終始登場するという花の役割の差異である。ウミチドリは作者の作った架空の花である。千鳥とは一般に多く群れて飛ぶ鳥を言う。海の千鳥のように多く咲き乱れる花をイメージさせる。実際ウミチドリの花は、「昼には二本、夜には四本、そしてあくる朝には、八本にふえている……」と指数級数的に増えていくことが説明される。この計算だと、八日目には一六〇〇万本を越えるわけで、とてつもない増え方をする不気味な花だとわかる。

一方でウミチドリの花の美しさが強調される。「ほろりとするほどきれい」で、「サムライたちの心にも、しずかにしみとおるうつくしさ」であり、「だれでもそっとつみたくなるほどうつくしい花」である。増え方のすさまじさからくる不気味なイメージと静かに心の琴線に触れる程美しいイメージとの両面を合わせ持った花として語られている。

ウミチドリの色は青である。冒頭で「海の青、空の青をこぼしたような、まっさおな花」と説明される。だが、海と空とは言葉の上で同じ青色でも、実際の色は両者とも違うはずであり、一見、違和感を覚える比喩である。

実は前述のウミチドリの異質な二つのイメージが関わっている。花が空のメタファーで語られている部分と、海のメタファーで語られている部分とは、使い分けられている。典型的な文を抜き出してみる。

・青空のしずくが花になったような青さです。

・だれもしらない夜のうちに、だれもこないしろのにわにひろがり、もりあがり、からみあい、のびていって、いつのまにか、おしろのにわは青いろのきれいな花の海になりました。

花がさっちゃんのうらにわで咲く場面や、最後にさっちゃんのもとに花びらが一まいだけ残る場面では、花の青さは空のメタファーで語られる。昼の空のイメージは、ウミチドリの花の美しさと呼応する。さっちゃんとの関わりの中で語られる時には、ウミチドリは、美しさの面が強調されている。

一方、花がおしろで咲く場面では、花の青さは海のメタファーで語られる。夜の海の底知れぬ不気味さのイメージは、とてつもない増え方をする不気味な花のイメージと呼応する。とのさまやおしろとの関わりの中で語られる時には、ウミチドリは、不気味さの面が強調されているのである。

シーガーの歌ではただflowersとだけ語られている花が、今江の「花はどこへいった」ではウミチドリの花として詳細に語られる。幻想的な美しさとすさまじい増え方という現実にあり得ない花を用いることで、今江の「花はどこへいった」は、ファンタジー作品としてウミチドリの意味を読者に考えさせる。

第二の相違点は、娘・若者・戦争・墓といった名詞を用いて特定の時代に縛られない普遍的な人間の戦争の問題を扱うのではなく、封建制度の時代の日本の経済の問題を扱っているという差異である。

今江の作品には、とのさま、サムライ、ご家老といった武士が登場するが、戦争で命を落とすイメージはない。（これなら、となりの国はおろか、将軍家にでもうりつけることができるぞ。）というとのさまの発想は、さかなもダイコンもウミチドリも交換価値に意味を見いだす貨幣経済的発想である。とのさまだけではない。咲いた花を見て「こんなきれいな花やったら、うれるかもしれへんなあ。」と指摘したのは村の民衆である。民衆もとのさまと価値観を共有している。

こうした価値観とは異質な存在としてさっちゃんが描かれる。さっちゃんが、ぎんいろの小さなさかなをひろったのは食べるためである。だがうらにわにていねいにうめた。「みればみるほどうつくしい」さかなを「とてもたべることなんてでき」なかったためだ。結果として「いくらとってもとっても、またいくらでもとれるさかなをすきなだけとって、ゆったりしずかにくらせるように」なるのであり、今江の作品はさっちゃんの美の心が経済的価値観に打ち勝つ物語とも読める。

「花はどこへいった」は、ファンタジーの方法によって物語として構成されている点でシーガーの「花はどこへ行った」と異なっている。もちろんシーガーの歌でなく別のテクストと比較することで、今江の「花はどこへいった」は、また異なった姿を見せるだろう。したがってここでの考察は、「花はどこへいった」の一面に光を当てたにすぎない。解釈とは対話的に織物のように編まれたテクストから、一紡ぎの意味を紐解く営みである。

てらだ　まもる　京都教育大学准教授。専門は読むことの学習指導研究（文学）。現在は小グループの読書を活用した学習活動の開発に取り組んでいる。

サブカルチャーと国語の授業

第３回

早稲田大学
町田　守弘

まちだ　もりひろ
早稲田大学大学院の研究室の開設10周年を記念して，『明日の授業をどう創るか―学習者の「いま，ここ」を見つめる国語教育』（三省堂）を刊行しました。サブカルチャーにも言及しています。

アニメーション教材による授業開発

今回は，国語科のサブカルチャー教材としてアニメーションを取り上げつつ，その具体的な扱い方を考えてみたい。対象とする学習者は，小学校から高等学校までの幅広い校種が設定可能である。アニメーション（以下「アニメ」）は学習者が日ごろから接する機会が多い素材で，十分に彼らの興味・関心を喚起できる。

アニメを用いた授業の具体例として，まず話し合いという活動を取り入れてみたい。アニメをどのようにとらえるかという点について，グループで話し合う活動を中心に授業を構想する。教材とするアニメの条件はとにかく短編であること，そして鑑賞に際して多様な観点が成立することの二点である。

教材の候補として，「岸辺のふたり」と「つみきのいえ」を取り上げてみたい。前者は約８分，後者は約１２分という短編であり，ともに映像とＢＧＭのみで構成されるアニメである。また，その作品世界を鑑賞するためには，多様な観点を考えることができる。

授業は２時間の配当として，まずアニメの全編を紹介する。鑑賞して感じたことや考えたことを踏まえて，このアニメをどのように読み解くことができるかをめぐって，グループ内で話し合う。身近なアニメに関する話し合いということで，活発な意見の交流が期待できる。

続く２時間目には，各グループの代表者が話し合いにおいて出された主な意見を整理して発表する。それをクラス全員で共有したうえで，再度アニメを鑑賞する。個人レベルの学びがグループレベル，そしてクラスレベルの学びへと展開しつつ深化して，再度個人へとフィードバックされるという点に授業の特色がある。同じアニメを２回鑑賞するが，１回目と２回目とでは異なる観点があることを確認したい。

続けてもう一つ，アニメを用いた授業の具体例を紹介する。教材とするのは，宮崎駿監督の「宮崎アニメ」である。分かりやすい内容で，５分程度のまとまりがあるシーンを教材として選ぶ。例えば「魔女の宅急便」で，主人公のキキが箒に乗って空から初めてコリコの町を訪れる場面を鑑賞しながら，映像からことばを引き出してノートにメモを取る。まず単語を列挙することにして，アニメの映像に登場するものと，アニメを見ながら想像したものとに分けてメモする。それぞれのカテゴリーから単語を選んでセンテンスを創作し，それをつなげて文章にする。最終的には詩のような形式で自由に表現する。完成した作品はＢＧＭとともに朗読して紹介する。配当予定は１時間だが，余裕があればグループ学習を取り入れることもできる。

アニメを通して価値あることばの学びを展開すること，それはすべてのサブカルチャー教材に求められる必要条件ということになろう。

三省堂の本

先生のための入門書
著作権教育の第一歩

川瀬　真 監修／大和　淳・野中陽一・山本　光 編

1,995円（本体 1,900円＋税）／ B5判・144 ページ／ ISBN978-4-385-36498-8

▶著作権教育に関する５つの理論と７つの実践事例を収録
▶小学生と学級担任，高校生，大学生の意識調査結果を掲載
▶実践モデルを小学校３例，中学校２例，高等学校２例紹介
▶小・中学校学習指導要領における著作権関連記述の一覧資料付き

著作権教育をわかりやすく！　新学習指導要領の実施に伴い，求められる「引用」をはじめとした著作権指導。はじめて取り組む先生に向けた平易で丁寧な解説とともに，実践モデルを収録した最新入門書です。

思考力を高める授業
作品を解釈するメカニズム

佐藤佐敏 著

2,100円（本体 2,000円＋税）／ A5判・160 ページ／ ISBN978-4-385-36077-5

▶理論編と実践編の２部構成で解釈のメカニズムに迫る
▶「竹取物語」「トロッコ」「故郷」など定番教材を豊富な発問例とともに解説
▶小・中学校の国語科授業展開案，全13本を収録

解釈はどうやって導き出されるのか。そのメカニズムの鍵は＜根拠＞と＜理由＞を分けることにありました。子どもの「読みの力」を高めるための新しい授業づくり提案書です。

編集後記

「辞書を読む」これは巻頭の三浦しをんさんのインタビューに出てきた表現です。辞書は「引く」ものだと思っていた私にとって新鮮な響きでした。

普段辞書を引く場合、自分の知りたい情報だけを取り出す読み方をしていますが、辞書にもそれぞれ個性があり、ただ語釈だけを読むのはもったいない。語釈以外の情報にも、面白さが詰まっていそうです。辞書編集者の話を聞くうちに、「辞書を読む」が自然な響きとして私のなかに定着しました。

この特集を通して、複数の辞書を引いてみる機会も増えました。辞書を引きながら文章を書くとき、そこにはひとつひとつの言葉と丁寧に向き合っている自分がいるのを感じました。

本特集が、いつもとは少し違った気持ちで辞書を手に取っていただくきっかけとなれば幸いです。

（み）

三省堂 国語教育 **ことばの学び** 第27号

二〇一三年五月二〇日発行
定価　一〇〇円（本体九六円）
編集・発行人　北口　克彦

〔発行所〕株式会社　三省堂
〒一〇一-八三七一
東京都千代田区三崎町二-二二-一四
ＴＥＬ　〇三（三二三〇）九四四六〔編集〕
振替　東京　〇〇一六〇-五-五四三〇〇
〔印刷所〕泰成印刷株式会社
東京都墨田区両国三-一-一二

三省堂の本

定評のある中学生向け国語辞典の決定版

最新の全社中学国語教科書を調査して語句を採録

例解 新国語辞典 第八版

林 四郎［監修］　篠崎晃一（編修代表）・相澤正夫・大島資生［編著］

B6変型判　1,344頁　<2色刷>

定価2,625 円（本体2,500円+税）　ISBN978-4-385-13687-5

◆ **新しい国語教科書に密着**

教科書の語句や新語・新語義・慣用句などを一千七百項目ふやして、総収録項目数は五万八千。

◆ **敬語の新分類と誤用に対応**

尊敬語・謙譲語・丁重語を使いこなすための［敬語］欄と、ことばの誤用に気づくための［注意］欄を新設。

◆ **国語辞典初の発展的内容**

共通語の姿をしているために気づかないうっかり方言が［方言］欄でわかる。和製英語は本来の英語とのちがいについて説明。

◆ **定評ある学習要素を強化**

用例・表現・参考・類語・対義語などの情報もいっそう充実。

新しい中学教科書にぴったりの最新改訂版

例解 新漢和辞典 第四版

山田俊雄（編修代表）・戸川芳郎・影山輝國［編著］

B6変型判　1,296頁　<2色刷>

定価2,625 円（本体2,500円+税）　ISBN978-4-385-13678-3

◆ **類書中最多の親字数七千余**

JIS第一・第二水準の漢字、新しい「常用漢字表」に対応。伝統的な部首配列。

◆ **豊富な熟語と用例**

漢語、現代語、漢字で書きあらわす外来語などを含む熟語三万五千五百。生きた用例を豊富に収録。

◆ **多様に広がる漢字の知識**

漢字本来の意味と日本語独特の意味・用法を区別して説明。

◆ **付録も充実**

「二十四節気」、「人名用漢字一覧」などを収録。

詳しくはwebサイトをご覧ください ➡ **http://www.sanseido.co.jp/**

回覧											